

# 絶滅懸念の淡水魚

# シナイモツゴ 生息環境守れ



絶滅が危ぶまれている淡水魚「シナイモツゴ」の保護活動をしている長野市の「ぼんすけ育成会」が、シナイモツゴが生息する同市信里地区の農業用ため池の水を使った米作りを始めた。同地区周辺は全国最大規模の生息域とされるが、遊休農地の増加に伴い、荒廃するため池が目立っている。米作りは、保護への機運を高める狙いで、収穫した米は「ぼんすけ米」のブランドで販売し、収益を保護活動に役立てる。6日は田植えをした。

## 長野・信里地区 住民の会、ため池保全へ米作り

シナイモツゴはコイ科で体長は5〜8センチ。県指定希少野生動物の一種で、県内では菅平湿原（上田市）や下水内郡栄村でも生息が確認されている。信里地区を含む長野市南西部では古くから「ぼんすけ」の愛称で親しまれ、現在は約400あるため池の1割ほどに生息している。



シナイモツゴ

シナイモツゴがすむため池の水を引いた水田で田植えをする「ぼんすけ育成会」。田の水は奥のため池に流れ、別の田で使われる。6日午前10時ごろ、長野市信里地区

マなどの植物が生えて湿地化し、シナイモツゴがすめなくなる」という。昨年1月に結成した同育成会は、地元小学校での観察会や、荒れたため池の手入れなどをしてきた。育成会自ら農業に関わることで生息環境を守ろうと、米作りに乗り出した。高齢のため今年から米作りを断念した農家の田約13ヘクタールを、

希少動物を守る狙いの米作りには、兵庫県豊岡市の「コウノトリ育む米」があるほか、シナイモツゴでも先行例がある。いずれも地域住民の理解と協力で活動の裾野は広がっている。シナイモツゴの名前の由来でもある「品井沼」があった宮城県大崎市鹿島台では、約20年前からNPO法人「シナイモツゴ郷の会」が保全に取り組む。生息するため池を使い、収穫した米を2008年から「シナイモツゴ郷の米」

### 県外の先行例 住民理解で活動広がり

として販売を始めた。シナイモツゴがすむため池の水で栽培したコメの認証制度も設け、ブランド化を進めている。同会の二宮喜喜理事長（73）によると、生息環境保全に理解を示す農家は徐々に増えているという。地元小学校と協力して繁殖やため池への放流などを続けることで地域の輪も広がった。二宮理事長は「地元理解やサポートが活動の支えになった」と話す。長野市のぼんすけ育成会は、米の販売拠点とする「ぼんすけ小屋」を同市信里地区に自前で建てた。住民が集まりやすいようにと県道沿いの目立つ場所を選び、これまでの育成会の活動と関わりがなかった人も小屋建築を手伝ってくれたという。

育成会の小林和子会長は

「つながりが波及し、住民の思いが一つになればいい」。きた信里の文化を残していきたい」と話している。（岡田理一）